



藤澤浮世絵館展示室

もくじ

- 「藤沢・相模の地図と歴史」展示紹介 P1
絵図と地図から読む歴史 P2
「行列東海道」の世界 P3
江の島の風景と弁才天・藤沢ゆかりの小栗判官等 P4
展示予告・ONIKAGE 学芸員のページ P5
浮世絵こぼれ話／編集後記 P6



歌川国芳「武英名馬競 小栗小次郎助重」

「東海道分間絵図」(藤沢宿周辺を抜粋)

藤沢・相模の地図と歴史

会期 2017年7月22日(土)～9月24日(日)

「藤沢・相模の地図と歴史」では、藤沢・相模の絵図や地図とあわせて、ゆかりのある浮世絵を展示します。

藤沢市の所蔵資料には浮世絵以外にも、江戸時代の絵図から近代の地図などの郷土の歴史の移り変わりを確かめられる多様な地誌資料があります。今回、「東海道分間絵図」、「相模國大地震の図」、「最新鎌倉江の島地図」などから藤沢・相模地域の形が、どのように表現してきたのかを紹介します。

企画展示コーナーでは、藤沢・相模の絵図や地図から見られる歴史に焦点をあてます。江戸時代に作られた東海道の絵図から、幕末期の黒船来襲に備えた沿岸防備の配置絵図など、歴史との関わりが深い様々な資料を展示します。

また、近代資料として、関東大震災や第二次世界大戦時の藤沢市の様子が確認できる地図などもあわせて紹介します。

東海道五十三次コーナーでは、幕末に出版され、多数の絵師が参加し多様に描かれた通称「行列東海道」を、藤沢宿コーナーでは、藤沢に深いゆかりがある小栗判官の物語の浮世絵を展示します。

江の島コーナーでは、海岸風景を焦点にして、江戸時代から明治、大正、昭和へと、観光の姿の移り行く様子をご覧いただけます。

浮世絵・絵図・地図とジャンルも様々に、描かれ方の変化も含め、藤沢・湘南地域の歴史をお楽しみください。

相模つて何?

「相模国輿地全図」

図1は、「相模国輿地全図」という江戸時代末期の相模国の地図です。輿地全図とは、その地域の全体図というような意味です。「相模」とは、江戸時代の國の名前です。國の下には郡が置かれ、東から三浦郡(右側の半島が現在の三浦半島)、鎌倉、高座、



図1 相模国輿地全図



図2 藤沢市域辺の拡大図

津久井県、愛甲、大住、淘綾、足柄下、足柄上の各郡がありました。現在の神奈川県から川崎市と横浜市の一部を除いた地域です。足柄下郡には小田原藩がありました。藤沢市域が含まれる高座郡は相模川の東岸に細長く設定され、南は藤沢・茅ヶ崎市、北は相模原市域まで広がっていました。郡の下には、人々の生活単位であった村が置かれ、その村々が併さり現在の市や町が形成されています。図2の図中に小判形に記されているのが村で、村名のほか、河川、名勝旧跡などが細かに記されています。青緑で塗られている箇所は山間部です。江の島も島頂部は標高が高いので、青緑に塗られています。身近にある地名が見つかることかもしれません。

関東大震災からの復興 「大藤沢復興市街圖」

この地図は、大正12年(1923)の9月1日に発生した「関東大震災」で大きな被害を受けた後の藤沢市の復興状況が記録された「大藤沢復興市街圖」です。震災から4年後の昭和2年(1927)に発行されました。

地図を読み解くと、思わぬ発見があります。例えば、今は残されていない競馬場やゴルフ場を見つけることができます。また、海岸線沿いを見ると、観光の呼び込みの一つだったのでしょうか、「蜃気楼」という表記があります。これは蜃気楼が見られる場所としてアピールしていたのかと興味をひかれます。地図は、ただ地勢を確かめるだけではなく、失われた場所や地名、また当時の暮らしも伺える資料でもあります。じっくり見ると、自分ならではの新しい発見ができるかもしれません。



(拡大図)



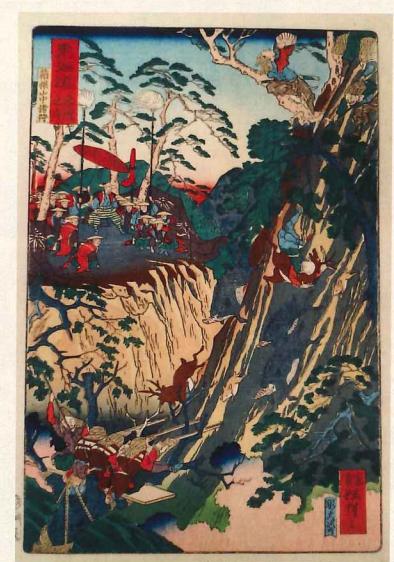
「大藤沢復興市街圖」

東海道五十三次コーナーには、幕末に発行された「行列東海道」から19点を展示します。「御上洛東海道」とも呼ばれるこのシリーズは、25軒の版元による共同企画で、16名の絵師が参加した162枚もの超大作でした。

作品が刊行された文久3年(1863)は、14代將軍徳川家茂による上洛が行われ、江戸の人々にとって的一大ニュースとなりました。上洛とは京にいる天皇に謁見する公式行事のことです。3代將軍家光の時より約230年ぶりの出来事でした。当時は、幕府の出版統制により、浮世絵に幕府に関わる実在の事物を描くことは禁じられていたので、この「行列東海道」では明確な表現を避け、若い武将の行列、または源頼朝に見立てた行列という設定で刊行されました。実際に家茂が上洛の際に通った東海道の道筋とは別に、上洛の行程にはなかつた場なども描かれ、幕末の東海道作品として大ヒットしました。

162枚のシリーズであることから分かるように、東海道の宿場の数以上に、様々な場所や事象が描かれているのが特徴です。図1の作品は、歌川芳艶の保土谷宿で雨による休息から雨があがつたことで、行列が出発し、奴たちが休みの間に開いた賭博から急いで行列に戻る様を描いています。奴の脚絆の柄の違いから、グループが違うことなどが分かり、諍いの原因がうっすらと伝わってくるのが面白いところです。

図2は、二代広重の描く平塚。相模川を渡り宿場に向かうところです。手前には葦毛馬にまたがる若武者がいますが、家茂を彷彿とさせます。大山が富士山なみの存在感があるのもこの地域ならではの表現です。図3は国貞(三代豊国)が描く大磯。東海道名所を背景に美人が配置される国貞ならではの構成です。女性は大磯ゆかりの虎御前。浜千鳥の着物柄が、恋人の曾我十郎の着物の柄で二人の関係を暗示します。図4は、狂猩猩ごと河鍋暁斎の箱根の猪狩、將軍家茂が座す前で、勢子が追い立てた猪や鹿などが、崖から逆落としになっています。獵師たちの動きや表情には、北斎漫画的な描写が見られ、自身も絵手本をよく出した暁斎の興味の幅広さが出ています。

図1 歌川芳艶
「東海道 保土谷其二」図2 二代歌川広重
「東海道 平塚」図3 歌川国貞(三代豊国)
「東海道之内 大磯」図4 河鍋暁斎
「東海道名所之内 箱根中山中猪狩」

展示紹介

江の島の風景と弁才天 江の島コーナー

江の島コーナーでは、毎回、様々な浮世絵に描かれた江の島を紹介しています。その多くは弁才天の御開帳について描かれたもので、海岸や江の島には、参拝する人々が描かれています。この江の島詣が江の島の存在を全国に広めた原点です。

江の島には弁才天という女性の神様が祀られており、そのご利益を求めて多くの人が参拝に訪れていました。弁才天は仏教の神様ですが、元々はインドのヒンズー教の「サラスヴァティー（聖なる川）」という意味）という名前の神様でした。日本には仏教の伝来とともに伝えられ、日本神話に登場する「市寸島比売命」という神様（宗像三女神の一柱）と同じ水を司るので、融合されていきました。また、仏教では「妙音天」とも呼ばれることから、音曲の神様、芸能の神様として信仰され、琵琶を持つ姿が一般的となりました。江戸時代になると、弁才天の「才」の字が「財」にも通じることから財宝をつかさどる神様として、七福神に加わり、広く親しまれる存在となりました。



定方塊石「湘南海岸の富士」



喜多川月麿「相州江ノ嶋巖屋の図」※8月22日から展示

展示紹介

藤沢ゆかりの小栗判官 藤沢宿コーナー

藤沢にゆかりが深い小栗判官の物語が描かれた浮世絵を展示します。

武者絵の名手、歌川国芳の描く「小栗十勇士」など、ダイナミックな作品です。右図の作品は、小栗判官が照手姫の助けを得て、地獄から蘇った場面です。

歌川国芳
「東海道五十三対 藤沢」
※8月22日から展示



イベント報告ピックアップ

出張！浮世絵すり体験

- 1月28日(土)・29日(日)
Beautiful Fujisawa観光PR
(会場: 東京スカイツリー)
- 3月12日(日) 藤沢宿まつり
- 5月3日(水) ふじさわ宿交流館



ワークショップ

- 2月26日(日)・3月4日(土)(2回連続)
「銅版画で浮世絵風景を描こう」
- 6月17日(土)・6月18日(日)(2回連続)
「かっぱすり・シルクスクリーンで
オリジナル江戸文字Tシャツ作り」

講座

- 3月25日(土)・4月1日(土)
「みくらべてみよう浮世絵絵図と現代の地図」
- 4月29日(土)・5月14日(日)
「版画の種類と素材の話」
- 6月24日(土)
特別企画浮世絵随談
「国貞の美人絵の背景に広重の東海道が!?'」
講師: 新藤茂氏(国際浮世絵学会常任理事)

見どころ解説 各日2回開催

- 3月11日(土)・4月16日(日)
展示「文明開化 変わりゆく浮世絵の景色たち」
- 4月22日(土)・5月28日(日)
展示「おまちかね広重の東海道」

展示予告

藤澤浮世絵館 開館1周年記念展

公益社団法人 川崎・砂子の里資料館

コレクション魅惑の世界

「江の島と名品浮世絵展」

2017年9月30日(土)～10月22日(日)



鳥居清長「江之嶋」
所蔵 公益社団法人 川崎・砂子の里資料館

江の島浮世絵を中心に、鳥居清長、喜多川歌麿、勝川春章など浮世絵黄金期を支えた絵師の名品を展示します。本展では、公益社団法人 川崎・砂子の里資料館のご厚意によりお貸しいただいた作品を交えて展示します。



歌川広重「東海道五拾三次之内 庄野」
所蔵 公益社団法人 川崎・砂子の里資料館

ONIKAGE学芸員のページ 浮世絵を伝えること③

「詰める話、ツマラナイ話」

暑い夏がやってきました。浮世絵は、温湿度管理に気を遣います。クーラーを入れると湿度が下がりますので、浮世絵のお肌がパサパサにならぬよう、ワタクシONIKAGE、姫を護るような気持ちで浮世絵を守る所存でございます。

今回は、浮世絵を展示する額縁に入れる時のお話を。

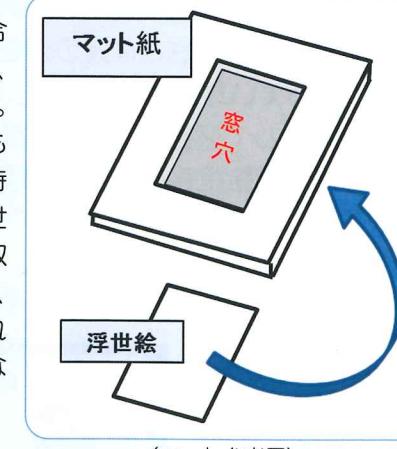
浮世絵館では多くの浮世絵を額縁に入れて展示しております。

額の中では、浮世絵がずれないようにマット紙で押さえています。マット紙とは、浮世絵の寸法より少し小さめに四角い窓をくり抜いた中性紙の厚紙です。

この窓の部分に浮世絵を合わせて、額に入れた時に綺麗に見えるようにするのですが、四角い窓の部分に浮世絵がピッタリ合うわけではないのです。というのも、浮世絵は現在のような額縁で展示しない江戸時代のもの・・・。浮世絵そのものの紙の大きさがまちまちだったり、元の持ち主がカットしてしまい、縁の余白がほとんど無いなど、四角形ではないものがたくさんあるのでございます。

まっすぐカットしたマットの縁に合わせて綺麗にお見せしたい気持ちで、何度も詰め直したり、斜めにしたり。オマケに、端にある版元印や極印も大事な情報なのであ見せしたい気持ちと、浮世絵保護からマットが浮世絵を支えるマチ(余白)を多めに取りたい気持ちのせめぎ合いがあり、両立するのが難しいのですが、これがまた、学芸員の腕の見せどころなのでございます。

これがなかなかツマラナイ・・・



〈マット参考図〉





浮世絵こぼれ話 03

江の島の写真の定番として、富士山とのツーショット画像が多く見られ、この構図は古くは江戸時代の浮世絵にも登場しています。

多くの絵師が「江の島と富士」を描いていますが、勝川春章が描いた「相州江之島ノ風景腰越ノ方より見図」[天明5年(1785)]【図1】では、江の島は中国古来の神仙思想で説かれる蓬来島に模して描かれており、右手に富士山を配し、上部の雲の朱色（日の出を暗示）と相まって、吉祥画として描かれたものと言われています。

江戸時代の末、天保期頃の歌川広重らの名所絵（風景画）では、「江の島と富士」は名所「七里ヶ浜」の画題として描かれることが多くなりました。「相州名所鎌倉七里浜」（天保末期頃）【図2】。この構図は明治になって浮世絵が絵葉書にとって代わられるようになっても続き、現在に至っているようです。（『特製コロタイプ刷 江の島の風景』（大正時代）から「相州七里ヶ浜」）【図3】。また、鳥瞰的な近代の絵図においても、「江の島には富士山がつきもの」ということで、江の島図の傍らに富士が添えられているものも見られます。（王生昌延「相州江之島真景」[明治30年(1897)]【図4】



図1



図2



図4

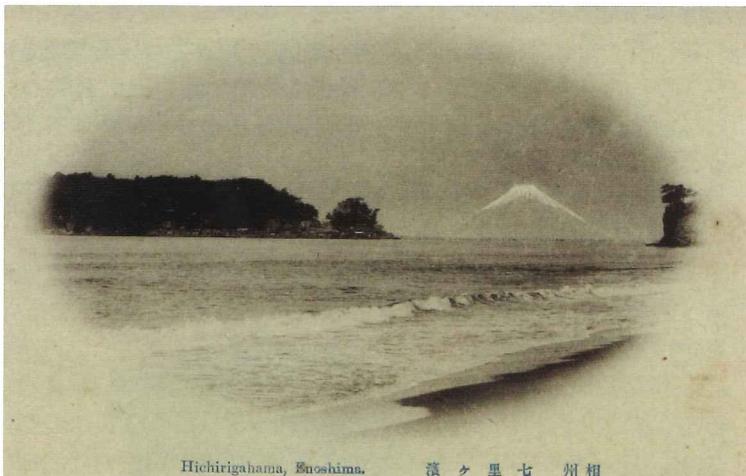


図3

編集後記

昨年の開館より1年が経ちました。開館の日は、セミが鳴き始め、学校は夏休み直前でした。新しい施設を運営する喜びや責任のプレッシャーに、暑さとは違う汗をかきました。さて、今号で浮世絵館だよりも3号目です。発行を楽しみに待っていただけの方も少しずつ増えたかな？と感じています。いろいろな話題やテーマを切ったり貼ったりして来館者のみなさまに興味深く味わいある便りをお送りしたいと思いますので、これからも藤澤浮世絵館をよろしくお願いします。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111 【FAX】0466-30-1817

【URL】<http://www.fujisawa-ukiyoekan.net/>

【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）

【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）

※展示替え等で臨時休館する場合があります。



facebook : 藤澤浮世絵館

公式アカウント



←このマークが目印です。 「いいね！」 お願いします。